
彼らが旅に出た理由

akane

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼らが旅に出た理由

【Nコード】

N6468Y

【作者名】

akane

【あらすじ】

【第1章】冒険者アルドが旅に出て地上の勇者と呼ばれるようになった理由とは。【第2章】美貌の少年リンは、何故に吟遊詩人として故国を旅立っていったのか。【第3章】勇者となったアルドが巻き込まれた戦いと、草原の娘との恋。

この話は、ムーンライトノベルズで連載中の、「旅と精霊と大地の歌」(BL)の番外編です。オムニバス形式で、「旅と精霊と大地の歌」の主人公である勇者アルドと美貌の吟遊詩人リンの過去が明らかにっていきます。

一章ずつ完結させていきますので、18歳未満の方やBLが苦手な方は本編を読まなくても大丈夫なはず（分かりにくければごめんなさい）。

残酷な表現が多発します。特に第2章、第4章には登場人物の被虐待経験及びぎりぎりの性的な描写を含みますが、反社会的な行為を推奨する意図はありません。

最初にお読みください

この話は、ムーンライトノベルズで連載中の、「旅と精霊と大地の歌」(R18・BL)の番外編です。

オムニバス形式で、「旅と精霊と大地の歌」の主人公である勇者アルドと美貌の吟遊詩人リンの過去が明らかになっていきます。最後の章のみ、本編完結後のもう一つの選択肢の世界(パラレルワールド)を綴っていくつもりです。

一章ずつ完結させていきますので、18歳未満の方やBLが苦手な方は本編を読まなくても大丈夫なはずです(分かりにくければごめんなさい)。

18歳以上の方で、両方読むという方は、まずは本編第20話「拒絶」の辺りまで進んでから第1章を読むことをお勧めします。(第2章は第2部の4話目くらいまで進んでから公開します。)

具体的な性描写は有りませんが、ぎりぎりの表現が多発します。

暗い話や痛い話も多いです。特に、2章と4章は登場人物の過去の被虐経験なども含まれますので、注意してください。

これらは、登場人物の性格を形成するのに不可欠なエピソードとして書きました。決して虐待等の反社会的行為を推奨する意図はありません。

途中、自作の歌が度々出てきます。実在する歌詞などと偶然一致した場合には、すぐに修正しますのでお知らせください(雰囲気似ている等のご容赦)。

掲載予定一覧(タイトルは未定です)

1章 地上の勇者(アルド16歳前半)

2章 宮廷の落とし子(リン13歳〜15歳)

3章 草原の花嫁(アルド16歳後半)

- 4 章 迷宮の核を求めて（リン15歳～18歳）
- 5 章 神々の祝福（アルド17歳前半）
- 6 章 豎琴の精霊（リン6～13歳）
- 7 章 森の怪物（アルド17歳後半）
- 8 章 各々の旅路（二人以外の登場人物達の旅の話）
- 9 章 再びの旅（本編完結後）
- 各章2～8話程度。

4 章以降は変更するかもしれませんが、このような予定で行きたいと思っています。

予定が変われば、ここに追記していきます。

登場人物紹介（本編開始直後）

アルド

18 歳 Aランク冒険者 剣士 セガン帝国出身

大地神に授けられた力と使命によって、魔物を討伐すべく旅をしている。

リン

18 歳（推定） 見た目は15歳 黒髪的美貌の少年 吟遊詩人
ラザ皇国出身

ある呪われた契約によって、『迷宮の核』を収集する旅に出ている。

最初にお読みください（後書き）

二つの小説の関連情報や更新予定については、後書きか活動報告（作者名クリックでマイページに飛びます）に記載します。
よろしく願います。

地上の勇者 1

「アルダリウス様！」

今日も家宰のバートの怒声が響く。この有能な家宰はアルドが子どもの頃から教育係として仕えており、その役目を終えた後に能力を見込まれて家宰の地位に就いてからも、何かとアルドの世話を焼いていた。

「どうしてここにいますのです。今日は、聖都からお招きした光の魔術師殿の特別講義があるはずでしょう。」

神殿に行っているはずのアルドがここにすることで、バートは憤慨していた。

「……あれにはもう行きたくない。」

アルドは光の魔法の習得に熱心になれなかった。父親から受け継いだこの魔力はわずかなもので、せいぜい夜道を照らすか、かすり傷を治療するか程度しかできなかった。

自分には才能が無い、と達観した顔でアルドは呟く。

「だからこそ、鍛錬するんでしょうが。」

苛々してバートは言った。

「いいんだ。そんなことより剣の腕を磨きたい。」

アルドは兄を亡くした8歳の頃から、ウィルド伯爵家の嫡子として聖騎士になるための訓練を受けていた。だが、太陽神の神殿に使用え、光の魔法で分かりやすい奇跡を起こして民の心を掌握する聖騎士の役目は、自分には向いていないと思っていた。そして、父親である先代ウィルド伯爵ユリウスが死去してからというもの、自分に重く申しかる家や職責に、アルドはつぶされそうになっていた。

アルドの祖母ロザリーは先代皇帝の姪であり、神聖魔法使いであった。太陽神に祝福を受けたアルドの祖父ジャン達とともに神の使命により冒険の旅に出て悪鬼を討伐し、滅びの危機にあったセガン帝国を救った。その後二人は結ばれ、当時下級貴族にすぎなかったウィルド家は、神殿に仕える聖騎士団の長として聖都に近いリアスを与えられ、伯爵に叙せられた。

ただし、王位継承権もあつたロザリーを元冒険者のジャンに正式に降嫁させるわけにはいかず、勘当という形をとった。また、本来リアス領主なら公爵位にある者になつてしかるべきなのだが、ジャンに与えられた爵位は神殿に仕えることを優先した二人のために、伯爵位にとどめられた。

アルドの母がウィルド家より身分の高い侯爵家の出身であるのも、こつした経緯があつてに他ならない。

魔物との戦いに破れて亡くなつた父の代わりに、領地は叔父が見てくれていた。しかし、この叔父は光の魔力が全く無く聖騎士でもないため、聖騎士の家系であるウィルド家を継ぐわけに行かない。

実質的に領地^{リアス}を守り治めるのは今のところバートが実務を行っており、母の実家である侯爵家も何かと手助けをしてきている。

聖騎士団は、父の頃からの優秀な部下と、神殿に強いコネクションを持ち、自身も卓越した神聖魔法使いである祖母によつて辛うじて支えられている。

その全てを、いつか自分は継がなくてはならない。自分と違って優秀だつた兄のことを思い出す。

ああ、旅に出たい。いつかは連れ戻されてこの家に縛り付けられるとしても、自分の可能性を試したい。太陽神と天空神に見込まれて冒険の旅に出た祖父のように。

アルドの潜在的な冒険心は、祖父と祖母から譲り受けたものである。
ろっ。

そして、16歳になったのを機に、アルドはロザリーとバートに
書き置きを残して出奔した。

アルドは当ても無く北へ向かっていた。父を殺した強大な魔物に
今すぐ打ち勝とうなど考えていた訳ではない。そこまで無謀では
ないが、父の最後の出征となった北への旅路を何となく追っていた
だけである。

父の形見の一振りの片手剣と少々の路銀だけを持ち、身分を隠し
てFランクの剣士として新たに冒険者ギルドに登録した。そして国
を行き来するのに必要なIDカードと冒険者だけが持つ特殊収納で
ある『バッグ』を手に入れ、北の連合諸国を放浪する。

アルドはもともと剣に天賦の才能があった。手練の剣士達の試合
を見るだけである程度は剣筋を覚えることができたし、数回手合わ
せをすれば、たいていの技は習得できた。

そして、多少無茶な道程で手強い魔物を打ち倒して行くうちに経
験値を積み、冒険者としてのランクも上がっていった。

剣の腕を上げながらギルドのクエストをこなしてBランクになっ
た頃、この地に伝わる、とある伝説を聞いた。

北東の雪山の頂に、人の言葉を理解し強大な力を持つ不思議な魔
獣が棲んでおり、打ち倒せば伝説の武器と獣の力が得られると言う。
アルドは、その不思議な地に行ってみる気になった。

冒険者酒場で聞いて雪山の装備を整え、さほど高くはない山を登り始める。辺りはすっきりと晴れていた。途中、冒険者らしい一人の男の姿を見た。彼も不思議な魔獣と伝説の武器を探しているのだろうか。

半日ほど歩き、山頂に着いたアルドは、麓の里の老人から教わった目印の岩や古木を慎重に追いながら、長い稜線を歩く。最初は良かった天候だが、夕刻になるにつれて、だんだん曇って風が出てきた。吹雪になるかもしれない。その場合には雪洞を掘って、吹雪が過ぎるのを待とう。食料も防寒の魔法具も準備してきている。

そこへ、一匹の狐が現れた。白銀の毛をしているので、ただの獣ではなく妖獣であることがわかる。だが、探している獣ではない。アルドは、不安定な足場の中で剣を構えた。妖狐はアルドに飛びかかった。その首を掻き切ろうとしたアルドは、慣れない雪の地面に足を滑らせ、谷へ向かって滑落していった。

アルドが目を覚ますと、自分の身体が何か柔らかい白銀色に包まれていた。雪に埋まってしまったのだろうか。だがその感触は温かい。不思議に思っ て身じろぎする。

自分を包んでいたのは白い毛皮だった。しかも、生きて動いている。

「うわっ！」

驚いたアルドは思わず叫んだ。

「おお、起きたかの。」

毛皮の主は、異形の者だった。白く長い毛に覆われた全身はアルドより頭二つ分は大きく、大きな青い目、耳元まで裂けた口。腕は筋骨逞しく、鋭い爪を持っている。

「ああ、怖がらんでいい。僕は取って食ったりせん。」

アルドが初めて見る怪物のような姿に怯えるのを見て言った。

「おぬしは、その谷間で、剣に縋り付くようにして雪に埋まって
おったのじゃ。運が良かったの。」

尾根から滑落する途中で無意識に岩に剣を突き立てて、谷底に落ちる前に止まったらしい。あれから吹雪になったらしく、そのまま埋まってしまったのだろう。尾根の反対側のなだらかな斜面は雪崩になったと言うから、アルドはずいぶん運が良かったと言えよう。

「僕は昨夜からおぬしを見ておったから、埋まっとるのに気付いて掘り出すことができたがの。」

吹雪は今後三日三晩続くと言う。掘り出してもらえねば、おそらく凍死してしまっただろう。

「すっかり冷えておったから、僕の毛皮で温めてやっておったのよ。」

辺りを見回すと、ここは石作りの古い建物のような場所だった。

今は昼過ぎだと言う。吹雪の音が微かに聞こえるが、部屋の中は暖かい。

アルドはこの異形の命の恩人に礼を言った。

「助けてくださりありがとうございます。」

「堅苦しい言葉遣いは無しにしておくれ。さあ、スープができてお
るから食べ。」

地上の勇者 2

熱いスープを飲みながら、アルドは里で聞いた伝説のことを語った。

「実は、この山に不思議な力を持つ魔獣がいると聞いてきたのだが。」

「雪男は笑って言った。」

「それは、儂のこととこの先にある迷宮の魔物のことが混じっておるな。」

雪男の住処からほど近いところに、名も無い迷宮がある。自ら武器を取って戦う者しか入れないと言う。そこには強大な力をもつ魔物があり、打ち倒せば神の恩寵を受けた伝説の武器が手に入るらしい。雪男はここでその迷宮の番人をしているのだといった。

「あなたが伝説の武器を守っているのか。」

「いや。儂は人間どもが迷宮に何か悪さをせんように見張っているだけじゃ。」

「では、私が魔物を打ち倒して伝説の武器を手に入れることに問題はないな。」

「やめておけ。あれは強い。おぬしのような子どもでは齒が立たんよ。」

アルドはこれまでの旅路で、自分に敵うような強敵に出会ったことが無かった。それは天性の剣の才と、太陽神の恩寵を受けた『光の剣』のおかげであった。

アルドが装備している片手剣は、亡くなった父親の形見で、もとは祖父のものであった。光の力が込められ、悪しき魔を払うことのできる太陽神の恩寵の聖剣だった。祖父はこれがかつて強大な

悪鬼を打ち倒した。父もまた魔物と戦うのにこの剣を装備しており、剣にかけてあった自動帰還の魔法により、父の敗北と死をウィルド家に伝えたのであった。

ただ、この剣は、騎士として馬上で振るうのには適していたが、生粋の剣士の性質であるアルドには使い難かった。特殊効果も光の力で魔を払うもので、かつて祖父が打ち倒した悪鬼などには力を発揮したろうが、生身の強靱な肉体を持つ魔獣などには効果が薄い。

また、例の父の敵の魔物は光に耐性があつたらしく、生き残りの騎士いわく、光の魔法はことごとく無力だったとのこと。この剣も同様だろう。

アルドは行き詰まりを感じていた。そこに、この伝説の武器の話を聞いて飛びついたというわけである。

「まあ、どのみち吹雪が収まるまでここからは出られん。」

アルドは、しばらくこの奇妙な山の住人に厄介になることにした。

雪男は親切だった。アルドに食べ物を与え、自分はもっぱら酒を飲んでいた。酔うと、これまでここに来た冒険者の話をした。今まで幾人もの冒険者が挑戦したが、誰もこの迷宮を制覇したことは無いと言う。アルドは黙って聞いていた。

そして、夜も更けた頃、雪男は、昔覚えた歌だと言ってある曲を歌い始めた。

我らは 永き眠りから目覚め

川となり 山々を下り 大地を覆う

草原を芽吹かせ 森を潤し やがて海へと旅立つ

光る雲は風にのり 故郷へと帰るだろう

再び 千年の眠りにつくために

雪男の声は、その異質な外見からは想像もできないほど、澄んでいた。

アルドが不可解だったことは、夜になるとアルドをその大きな毛むくじやらの体で包むように眠ることだった。

「なぜこのようにくつついて寝る必要がある？」

石の壁は吹雪を防ぎ、離れて寝たとしても凍死する心配は無い。

「まあ、よいではないか。」

白い毛皮は見た目どおり柔らかく、アルドは嫌な気持ちはしなかった。それで、されるがままに抱かれて眠った。

夜半、アルドは不思議な感触に目が覚めた。

毛むくじやらだったはずの雪男の体が消え、変わりに白く滑らかな腕に包まれていたからだ。

背中に吐息を感じ、振り向くと、白銀の髪、大理石のような肌、

彫像と見まがうばかりの美貌の青年がそこに寝ていた。

青年はアルドの茶色い髪に顔を埋めるように眠っていたが、アルドが動いた気配に目を覚ました。あの雪男と同じ青い目をしている。

「ああ、見られてしもつたか。」

「あなたは、いったい何者だ。」

「……自分の名など、もう忘れた。」

青年は、アルドを抱いたまま話し始めた。

ずっと昔、自分がまだ人間だった時のこと。恩寵の武器を求めて迷宮の魔物に破れ死を覚悟した瞬間、神の使いだという『凍土の精霊』が現れた。その身を迷宮の守護に捧げるなら命だけは救ってやると言う。誓約を交わし、気付いた時には異形の姿となっていた。以来、ずっとここで迷宮を訪れる者を待ち続けているというのだっ

た。

「だが、それももうすぐ終わる。」

精霊の神託によると、近いうちに伝説の武器にふさわしい者が現れ、魔物に打ち勝ち、雪男の使命も終わるはずだと言う。

「それで、ここに近づく者らを注意深く見張っておったのだが、現れたのがおぬしのような子どもだったのじゃから、期待外れにもほどがあるわ。」

アルドは子供扱いに憤慨しながらも、自分の運命を試してみようという気になっていた。もうすぐ現れるという神に選ばれし者、それが自分なのではないかという淡い期待に胸が高鳴った。

「おぬしは、儂が止めようが、迷宮に行く気なのだろう。」

アルドは黙っていた。

「おぬしはまだ若い。これから幾らでも機会はある。みすみす死んでくれるな。」

青年は、アルドを抱く腕に力を込める。

「儂は、多くの人間があゝの魔物に破れるのを見てきた。死んでいった者らの中にはおぬしのような少年もおったよ。」

アルドは、この異形の青年が孤独なのだと言うことに思い当たる人里には帰れず、ひたすら自分の使命を終わらせる人を待ち続けているのだ。アルドはその事実にも胸を打たれた。

アルドの天性の素質として、人の心の傷や苦しみが見えるという能力があった。アルドは特に人の思考を読むことに長けているわけではなかった（むしろ鈍感な方である）のだが、なぜか、人の抱える痛みや覆い隠された苦悩にだけは敏感に反応した。この性質が、アルドの今後の旅に影響を及ぼすことになるのだった。

アルドの背中を抱きしめる青年の肌は暖かく、その鼓動と吐息は確かに人間のものだった。

「おぬしがそれでも行くと言うなら、しばらく儂の元で過ごし充分に体が出来上がってからにするといい。吹雪が終われば剣の相手もしてやるう。」

アルドは頷いた。

いつしか眠ったようで、朝になると青年はあの見慣れた毛むくじやらの姿に戻っていた。

地上の勇者 3

アルドは、促されるままに、雪男から剣を習った。彼は、その大柄な体躯からは想像できぬほど、緻密に剣を振るった。アルドがこれまでに見たどんな剣士のものより素早く正確で美しかった。もとは高名な剣士の家柄が、身分ある人に仕える騎士だったのではないだろうか。

いつものように、アルドはその剣の筋を正確に写し取り、己のものとしていく。その剣を受ける雪男は感嘆した。

「おお、意外にやるではないか。おぬしを見直したぞ。」

だが、雪男は淡々と剣を振るアルドに、一抹の不安を感じていた。この少年に、己が剣の天才だと言うことに対しての慢心はない。

しかし、謙虚に地味な鍛錬を積もうという意志もない。あるのはただ、強くなりたいという欲のみであろう。それが、まだ成長過程にあるアルドの強みでもあり、致命的な弱点にもなりそうだった。

彼は精霊に命を救われて神に誓約しこの迷宮の守護人となったが、授けられた使命というのは、ただ見守ることであった。

主に、迷宮にたどり着く前に力尽きた者らを大地に還すのが仕事であった。この辺りの土は年中凍り付いている。少し離れた麓の、春になれば溶ける日当りの良い場所を選んで、冒険者達を埋葬した。宝目当てで迷宮を荒そうとする冒険者のパーティーがいれば、雪の幻術で惑わし山を降りさせた。

時折、吹雪に巻かれた者をほとんど姿を見せないまま雪洞や洞穴に誘導し休ませることもあったが、アルドのように連れ帰って暖めてやり、会話を交わし、あまつさえ本当の姿を見せたことなど今までになかった。

谷でアルドを見つける少し前にも、一人の男が雪崩に巻き込まれる姿を見た。雪崩に吞まれたのでは、慌てて駆けつけ掘り出しても助かるどうかはわからない。搜索に時間がかかり夜が更ければ、雪男も自由には動けなくなる。雪男はそれもまた運命と諦め、雪に埋まった男を捜しには行かず、アルドを探し出すために谷を降りた。

雪男は考えた。自分は何故この少年にここまでしてやるのか。雪に覆われた凍土ではめったに見ない土のような茶色い髪を見かけ、珍しさを覚えた。それが谷を転げ落ちる姿を見て狼狽し、アルドが落ちた谷を探した。半ば雪に埋もれあどけなく眠るような顔を見て、懐かしい思いで連れ帰り、手当てしてやった。抱き上げると体温だけではない暖かさが伝わってきて、永く忘れ去っていた人恋しさに、そのまま腕に抱いて眠ってしまったのだ。

自分はこの少年をどうしようというのだろう。初めての出来事に、雪男は混乱していた。

吹雪が止んで5日後。雪男が食料調達に出かけて居ない隙に、アルドはその住処をそつと後にした。

迷宮に入って前半は順調だった。次々と襲いかかる氷の獣達は、アルドの敵ではなかった。冷たく光る蝙蝠や狼らを、剣を振るって砕いていく。ドロップアイテムを拾い、稀に出現する宝箱を開けて魔法装備などを収集し、特殊収納に仕舞った。バッグ

迷宮の中ボスは、雪女だった。美しい氷の面とは裏腹に強力な魔力を持ち、残忍な術を使う。

口から吹雪が吹き出されるのを飛び退って避ける。次に、雪女が

袖を振ると氷の刃が飛んできた。これも落ち着いて全て撃ち落とす。あの雪男が振るった、正確で美しい剣技を思い出しながら。

雪女に一瞬の隙ができたのを見逃さず、剣に光の力を込め、一気に振った。雪女は氷の塊となり、砕け散った。

オオオーン！

絶叫が響き、迷宮の壁が揺れる。壁や天井から、氷の礫が振ってくる。

アルドは氷礫を避けて走る。

そこへ、雪男が追いついた。

アルドは黙って出てきた気まずさから雪男を顧みず、そのまま最下層に向かう。アイテムも宝箱も放置して走った。

その時、床が崩れる。単純な罠^{トラップ}だった。

アルドの足もとが音を立てて崩壊し、気付いた時には最下層におり、氷の塊に埋まっていた。

「無茶しおってからに。」

氷に埋まったアルドを雪男が掘り出そうとする。その背後に、強大な影が近づく。迷宮のボス、魔獣メガトン・ベアであった。

この巨大な魔獣は、大きな体とは裏腹に素早い動きを持つ。魔力はほとんどないが、その爪は一撃でアルドの頭を吹っ飛ばすことができるだろう。

メガトン・ベアの一撃を雪男は飛んで避けた。アルドが埋まった氷塊が大きくえぐれる。

アルドは戦慄した。こんな所で動けないまま自分は死んでいくのか。その時、雪男がアルドを庇うように魔獣に対峙した。雪男が振るう剣はメガトン・ベアに正確に当たるが、ほとんど傷を与えることはできないようだ。しかし、雪男は焦って倒そうとせず、落ち着

いて少しずつ体力を削るようにダメージを与えていく。メガトン・ベアの爪も幾らかは雪男に当たるが、神の力で変化した身体だから、致命傷にはならないようだ。

雪男は、攻撃の合間にアルドが埋まった氷の塊に慎重に剣の一撃を与え、ひびを入れる。アルド自身にも衝撃が伝わった。

「アルド、逃げよ。」

アルドは魔力を最大限に手のひらに込め、熱を生み出す。拘束していた氷がゆるみ、アルドはようやく自由になった。

その時、雪男の体に変化が起きた。白く長かった毛が縮み、身体が一回り小さくなっていく。雪男は本来の人の姿に戻ってしまった。青年は、薄い布の服と剣以外には身につけていない。一撃でもまともに爪を喰らえば命は無いだろう。魔獣の攻撃をひらりと素早く躲しながら、さらに剣を打ち込んでいく。

アルドは我に返り、光の剣を握りしめると、メガトン・ベアに向かっていった。

地上の勇者 4

ものすごい衝撃に、爪を受け止めた光の剣ごと吹き飛ばされ、氣付くと冷たい土の上に横たわっていた。迷宮の最下層の床は氷ではなく、地面だった。

再びアルドの意識は遠のき、視界が暗くなっていく。メガトン・ベアの爪が銀髪を襲う姿がぼんやりと見える。

「お前はここに来る予定ではなかった。」

アルドの頭に不思議な声が響く。

「あの時、谷底で死ぬ定めだった。今もまた、あの魔獣に倒され死にかけている。」

大地から伝わってくる言葉のようだ。

「お前はそこまでして力や剣が欲しいのか。」

「欲しい。」

アルドは、腹に力を込めて返事をする。何者にも打ち勝つ力を。

自在に操れる強力な剣を。

「父の敵を討つためか。」

アルドは考えた。力が必要な理由はそれだけではない。運命を自分の手で切り開くために欲しいのだ。

「お前には、本来その資格は無い。代償は大きいぞ。」

アルドに迷いは無かった。今のままでは、自分だけでなくあの青年まで巻き添えにして死なせてしまう。自分の無力さを噛み締め、力が得られるならどんな犠牲も厭わない気になっていた。

「では、誓え。」

地上の勇者として、大地神の使命に従うことを。生まれ持った魔力も太陽神の加護も捧げることを。そして、大地の子である人をけ

して殺めないということを。

アルドの脳裏に、ある歌詞と旋律が浮かぶ。

「全てを受け入れた承するなら、祈れ。そして歌うがいい。」

大地より生れ 大地に還る

母なる大地の その腕に

我ら 地上に生きる 全ての人よ

偉大なる大地よ

我らは大地の子

アルドが歌った時、その手に暖かい力がこもる。促されて大地に両手を付けると水面のように柔らかく、少し進むと手に何かに当たった。握りしめると、それは一振りの長剣だった。

「お前の生命と旅路を祝福する。その剣を存分に振るい、大地に巣喰う魔物らを打ち倒せ。」

その光景を目にし、迷宮を守護してきた青年は驚きつつも納得した。やはり彼が選ばれし者、『地上の勇者』だったのだ。一瞬氣を取られた隙に、メガトン・ベアに肩を挟まれる。傷口から血が噴き出し、意識が薄れる。

青年が倒れる瞬間に、アルドの持つ剣が強大な魔獣を倒すのを見た。

白い髪の少女の姿をした『凍土の精霊』が現れて二人に言った。二人の傷はすっかり癒えている。

「もともとアルドは『大地の剣』を与えられる者ではなかったのよ。」

精霊いわく、迷宮の守護人である雪男が選んだ偶発的な出来事が

きっかけで、運命に歪みができたと言う。アルドは人間のみならず、精霊や特殊な存在を惹き付ける性質なのだろうか。

「本来、勇者になるべきだった人は、雪崩に巻き込まれて雪の下で眠っているわ。」

やはりあの時、と美しき青年は心を痛めた。

「あなたのせいではないわ。あなたがもしアルドではなく彼の元に駆けつけていたとしても、助かったかどうか分からない。あなたは結果として、救うべき方を救えたことになるわ。」

最悪、三人とも死ぬ運命もあったという。

精霊は、青年に労うように言った。

「あなたが選んだ彼への祝福は、今まで迷宮の守護人として働いてくれたあなたへの報酬の意味もあるの。今後は自由に生きて。」

そして、精霊はアルドに向かって強い眼差しで言う。

「与えてしまったものは仕方が無いわ。神の力と使命にふさわしい人間に、早くなりなさい。」

運命のいたずらにせよ、アルドは望み通り強大な力と剣を手に入れた。

誓約したのが大地神であることとその恩寵である『大地の剣』を与えられたことに、アルドは驚きと感動を隠せなかった。大地神の祝福を受けた者は、冒険者達の伝説の存在である『地上の勇者』と呼ばれるようになるからだ。

「あなたの旅は波乱に満ちたものになるでしょう。」

勇者としての使命を忘れず生きるよう、凍土の精霊は言った。

「僕は、人里に下りるのは数十年ぶりになる。」

夜が開けても雪男の姿に戻らなかった青年が言った。アルドが宝箱から見つけたマントや防具を身につけ、身支度を整えた青年は、

王侯貴族のように凛々しく美しい。

「戻る国はもう無いが、新たな人生を生きることにするわい。」

アルドは、いつの日かの再会を祈って青年と固く握手し、やがて別々の方角に歩んでいった。

アルドが雪の山を降りた直後に、凍土の精霊ではない土色の髪をした娘が今後の事を告げに来た。娘は『沃地の精霊』を名乗った。

「あなたの實力では、その剣の本当の力を引き出すことは出来ないだろう。今のままでは、あなたの父の敵を討つことも叶わない。」

「どうすれば良いのですか。」

「旅を続けなさい。そこで新たな力が得られよう。」

精霊は、アルドに『精霊との対話』の術を授けた。

「常に、精霊の言葉に耳を傾けるといい。そこに大地の神の導きがある。」

また、新興の大地の神殿には礼拝しなくてかまわないが、道中の古い祠や聖地にはなるべく寄り、剣を捧げて『大地の歌』を歌うことをアルドに約束させた。

そして、旅の助けにと『地の呪縛』と『高速移動』の術も教えてくれた。

「後は、あなたの意思の赴くままに進んでかまわない。いずれ運命があなたを導くだろう。」

アルドは、神妙な面持ちで頷いた。

とりあえず、南に行こう。そして、故郷には帰らずに東に進もう。

アルドはまだ見ぬ広大な草の海に思いを馳せた。

地上の勇者 4（後書き）

地上の勇者 完

次回「宮廷の落とし子」に続く。

先にムーンライトノベルズに「旅と精霊と大地の歌」の第二章を掲載します。こちらの更新は週末になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6468y/>

彼らが旅に出た理由

2011年11月21日12時00分発行